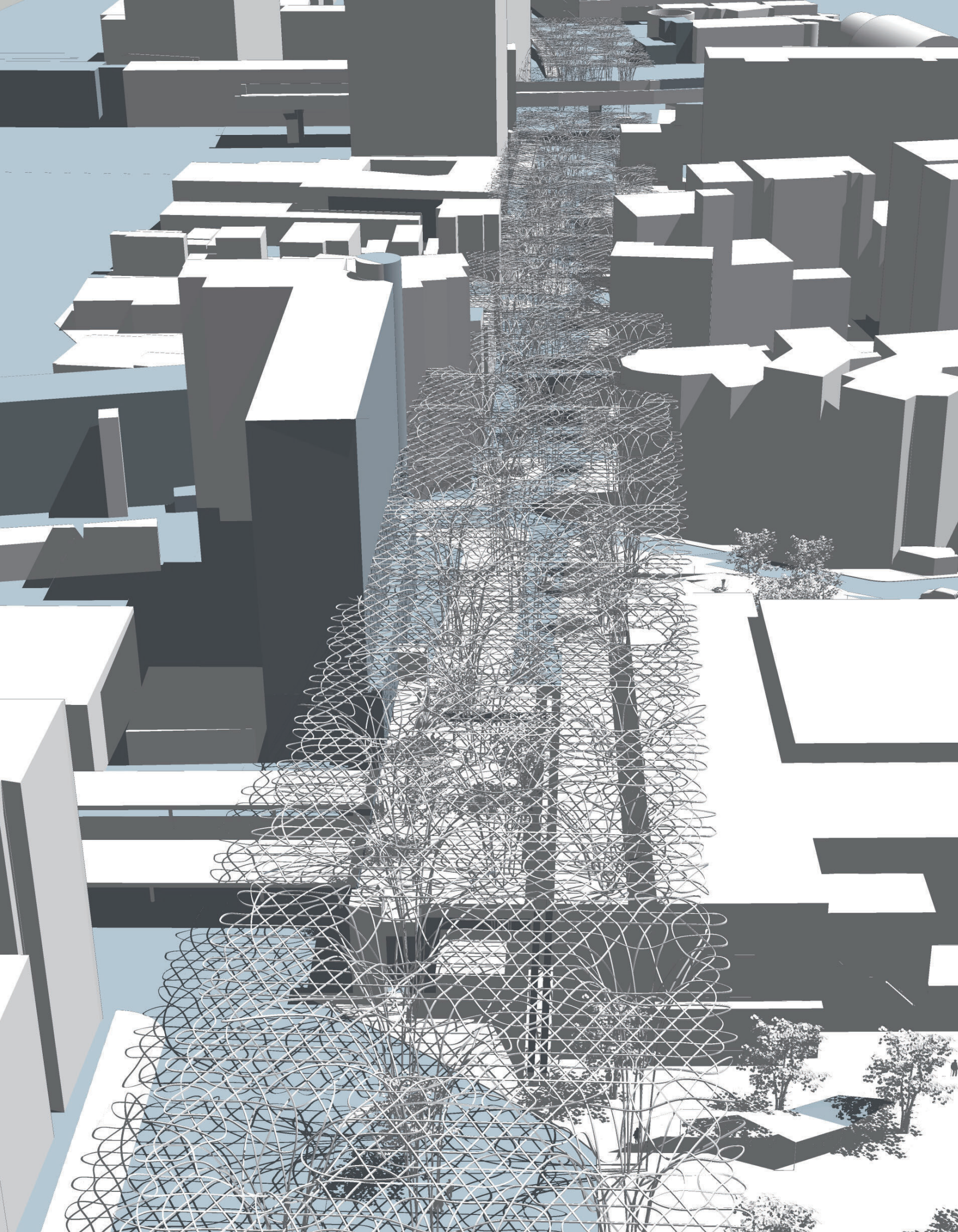


Museum Walk Under the Urban Canopy

木造キャンピアーケード



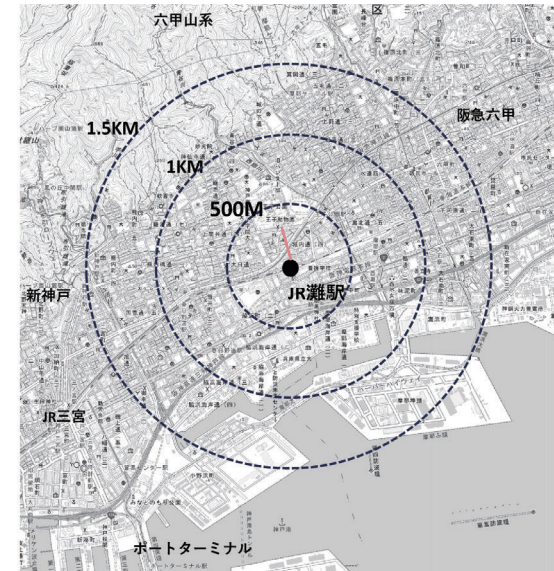
背景

神戸市灘区は市の東部に位置し、北に六甲山や摩耶山を望み、南は瀬戸内海に面した自然豊かな地域です。自然を身近に楽しめる山麓側は文教地区や閑静な住宅街、六甲山の湧水と六甲おろしが通る中央部は住商地域、海側の埋立地は工業・港湾流通業務地や東部新都心です。

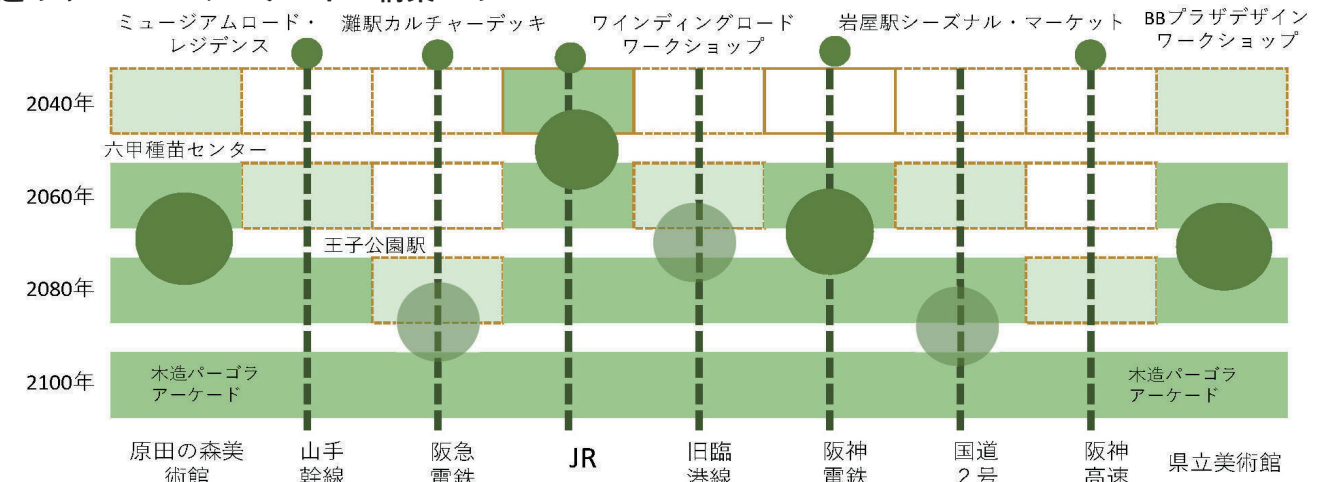
六甲山麓の原田の森は、競技場や動物園のある王子公園になり、樹木や子ども等の守護神として信仰されてきた王子神社も公園の南に移設されました。JR 灘駅周辺は昔から神戸と大阪を繋ぐ交通の要衝で、商業地や住宅地として栄え、神戸港や大阪湾への物流の拠点としても賑わいました。神戸臨港線跡の遊歩道は、神戸港の発展に寄与した日本初の臨港線跡地です。さらに南の阪神岩屋駅の近くには、神戸市内最古の格式高い神社のひとつである敏馬神社もあります。このあたりは敏馬（みぬめ）の泊と言われた場所で西国街道にも面していたため、各地からの参拝者で賑わいました。臨海地域は、阪神・淡路大震災からの復興シンボルプロジェクトの HAT 神戸が東部新都心として開発されています。このように、各地域がそれぞれ異なった個性と特徴を持っています。神戸ミュージアムロード周辺はまちの中央部を南北にむすぶ神戸ミュージアムロードのなだらかな坂道周辺には、旧県立美術館（原田の森ギャラリー・横尾忠則現代美術館）、灘浜の兵庫県立美術館の他にも、王子動物園や BB プラザ美術館等のミュージアムや多くのパブリックアートが存在し、文化と芸術の薫る街として整備が進められています。

コンセプト

ミュージアムロードには、文化施設が点在しながらも、国道 2 号線、阪急・JR・阪神といった交通インフラにより細かく分断され、文化施設間の歩行の連続性が断ち切れ、一つの文化軸として機能していないという大きな課題があります。そこで我々は、この通り全体に巨大な木造パーゴラのアーケードを「時間をかけて育てる」という提案を行います。それは雨よけの屋根ではなく、「光や雨、風を受けながら街に新しい表情を生み出す自然の帯」です。木漏れ日の影が揺れ、雨粒が光り、風がすり抜けて、その下ではアートやイベントが自由に展開し、人々が歩き、立ち止まり、交流することができます。木造アーケードは十年、二十年、五十年と、世代を越えて少しずつ増設し、最後には原田の森美術館から兵庫県立美術館までをつなぐ「一本の文化の帯（アーバンキャンピアー）」を完成させます。初めから「完成品をつくる」のではなく、時間をかけて完成していくプロセスそのものが市民参加の文化プロジェクトとなる長期的で持続可能な都市の文化プログラムです。構造材には、六甲山系をはじめとする地元の間伐材を積極利用することで、伐採、乾燥、加工、施工のサイクルを地域の林業・製材・建設産業が担い、50 年かけて通り全体を完成させる超長期の建築プロジェクトとします。



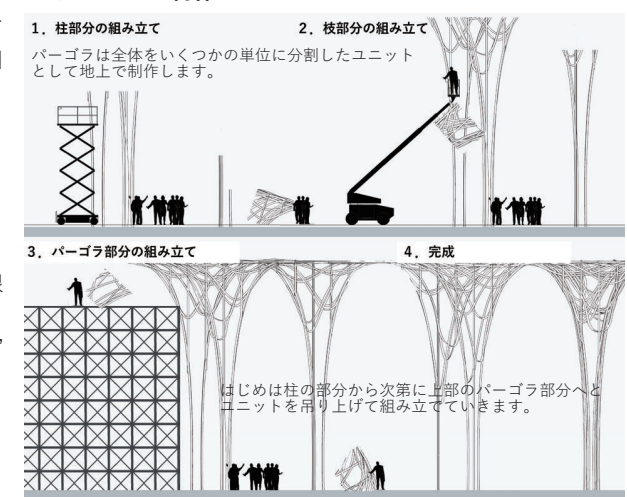
木造キャンピアー・アーケードの構築スキーム

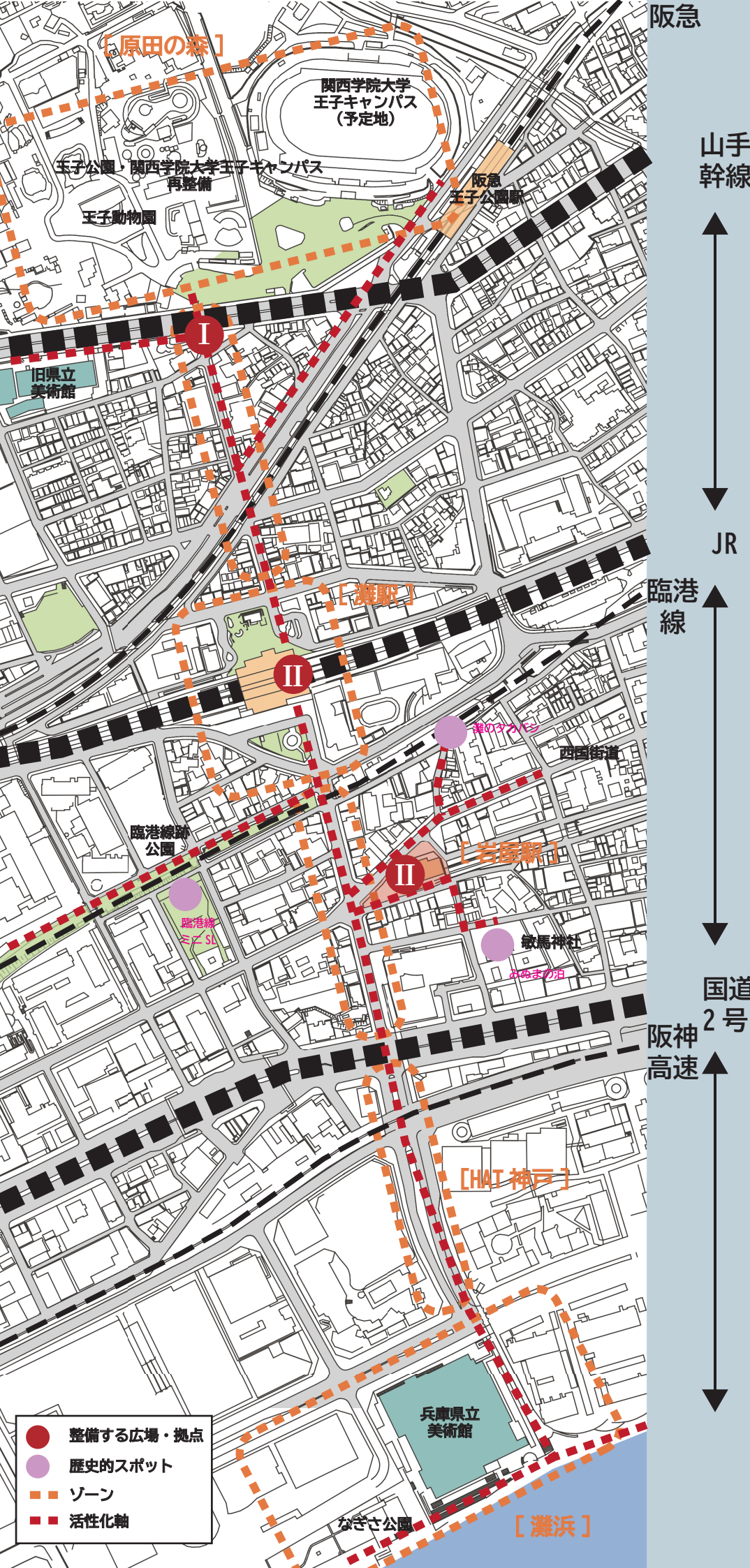


アクティビティ

これまでミュージアムロードではワークショップ、アート散歩、パブリックアートを活かした散歩イベントなど、多様な切り口で「ミュージアムロードらしさ」を体験する機会が設けられてきました。例えば 1 DAY JAZZ ROAD は、ライブステージを複数地点に分散して設け、ストリート全体を使う構成でした。これにより「ただの施設訪問」ではなく、歩きながら、街を巡りながら若干の流動性を生んでいます。また美かえるカラフルマルシェは、大人も子どもも楽しめるワークショップやマーケットを取り入れ、地域の住民や近隣の家族層を対象に「ミュージアムロード」に足を向けるきっかけをつくってきました。ただ、これらのイベントはどうしても「イベント当日」「特定の施設・広場」「限定された時間・空間」に集中しがちで、幹線道路や線路による分断、アクセスのしづらさ、歩きやすさ・回遊のしやすさの問題といった根本の「まちの骨格」はほとんど手が付けられてきませんでした。「文化軸の断絶」は、イベントによって一時的に「盛り上がり」を作るには有効ですが、日常的・継続的な回遊路としては弱いのが現状だと思われます。今回の提案はこのミュージアムロード全体にかかわる共通の街づくりプログラムとして長い時間をかけて少しずつアーケードを造っていく市民参加の一大文化プロジェクトと考えています。

キャンピアーの制作

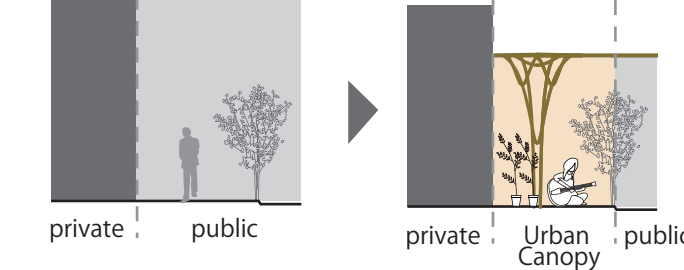
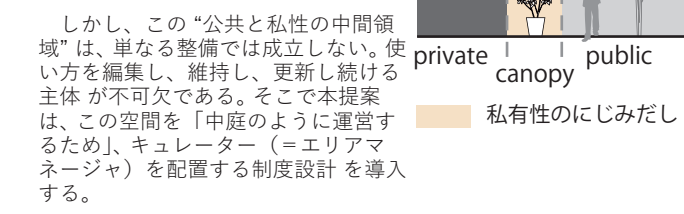




アーバンキャンपीー Urban Canopy

空間を覆う＝都市への私有性

ミュージアムロードのキャンピーによって覆われた空間は、道路でありながら、都市内部の“軒下”の性格を帯び始める。ここには従来の公園や歩道と異なる特徴が生まれる。それは、公共空間に私有性がにじみだした軒下化する都市空間が生成されるということになる。



1 コミュニティ Community

使い方を開く＝都市を民主化

ミュージアムロードのキャンピーは、“使われ方の余白”を提供する装置である。その下の空間は、住民自治組織、大学、商店街、企業、そして来訪者までが、展示し、語り、働き、学び、集うことのできる都市のコミュニティ編集の場となる。キャンピーは、従来の道路が持たなかった公共をつくる力を与える。そこに居る人々が、空間を使い、変え、育てていくことで、まちが“つくられる都市”ではなく“育てられる都市”へと変わる。キャンピーの下に、人が育ち、関係が生まれ、都市を更新する力が滞留する。



住民参加プログラム Community

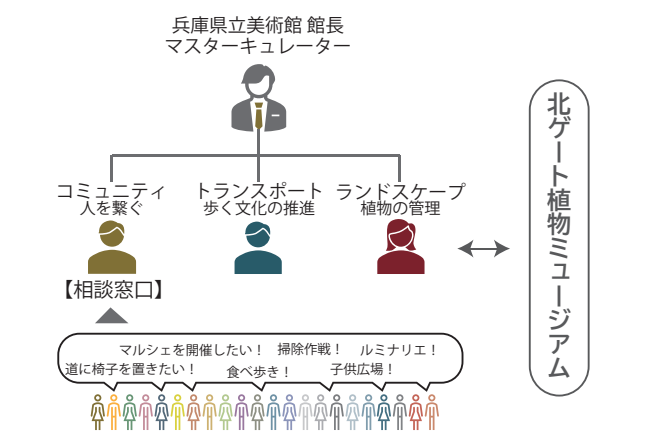
- 六甲木材サポーター制度 (木のオーナー制)**
市民が1本の柱、1モジュール、1梁を「育てる」権利を持ち、伐採→乾燥→加工→設置の過程を追跡できることで時間の物語が市民の物語になる。
- 伐採・製材ツアー - 六甲山系の森を「見に行く」-**
間伐の現場に実際に入るワークショップを実施し、山と街の関係性を実感でき、木材利用の意義を理解して「六甲の森を育てる文化軸」という強い物語が生まれる。
- DIY 市民組み立てワークショップ**
パーゴラの一部（ベンチ、スクリーン、棚、フックなど）を市民が組み立て、専門家監修のもと、毎年1~2モジュールずつ増やしていくことで、年ごとの「成長の節目」がコミュニティ行事になる。
- ミュージアムロード・レジデンス (ローカルアーティスト支援)**
毎年1~2名のアーティストが1~3ヶ月滞在し、キャンピー下で作品制作・展示・路牌制作を行い、住民が制作プロセスを見学・参加できることで、通りが「常に変化し続ける美術館」になる。
- 市民ガーデナー制度 (“通りの庭師”)**
キャンピー下のプランターや下の植物を市民と管理し、エリアごとに「ガーデナー」のチームができ、通り全体が“市民の庭”として育つ。
- 植栽の交換デー**
住民が自宅や育てた植物を持ち寄り、通りに植える日を設けてキャンピーが「住民の植物図鑑」になり、育てる喜びと帰属意識が生まれる。
- ソーシャルテスト (交通実験)**
車線を一時的に閉じてマーケット、ステージ、ワークショップを展開し住民が道路の新しい使い方を体験できる。
- 子ども交通デザインワークショップ**
子どもが「自分が歩きたい道路」をモデルでデザインし、実際にその案がキャンピーモジュールや舗装に反映される仕組みを作る。

キュレータとは What is a Curator?

人・活動・空間を編集する存在

キュレーターとは、住民や関係者の合意を調整し、アーバンキャンピーの下に広がる空間の使い方や企画運営を提案・実行する、ミュージアムロードの編集者である。公募制・任期制で選ばれ、全体を統括するマスターキュレーターは兵庫県立美術館の館長が務める。

本プロジェクトでは、①コミュニティ、②ランドスケープ、③トランスポートという三本の柱それぞれに専門キュレーターを配置し、「住民・関係者」「景観・自然」「移動・歩行」の3領域を横断して協働しながら、ミュージアムロードを使いながら育てる都市運営モデルを形成する。

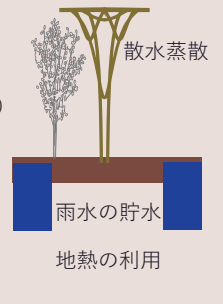


2 ランドスケープ Landscape

植栽を抱え込む＝都市を森化

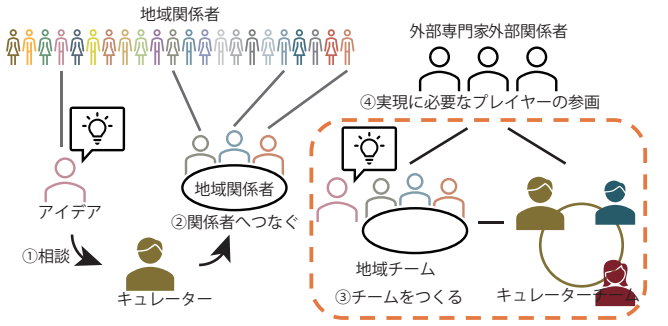
キャンピーは、街路樹のための“環境支持体”である。光を刻み、影を生み、蔓植物を支え、雨を受け、生態を育てるための都市の骨格構造として機能する。その役割は、単なる緑化ではなく、道路という生命が否定されてきた場所に、植物と時間を挿入することにある。キャンピーは「建築が景観を育てる」そして「景観が都市を育てる」という価値の転換を生み出す。キャンピーは都市の森を支え、神戸の道路を成長する生態の回廊に変える。

- 機能**
街路樹の育成フレージング
雨水のため、蒸散させる気候適応構造
影のコントロール
季節性の演出（花、緑、落葉、ライトアップ）
緑と光の“室内的な空間”の生成
- 社会的意義**
土壌の再生
水循環の回復
微生物・昆虫・鳥の回帰



道の管理体制 Road Governance System

みんなでつくり、みんなで育てる道の管理



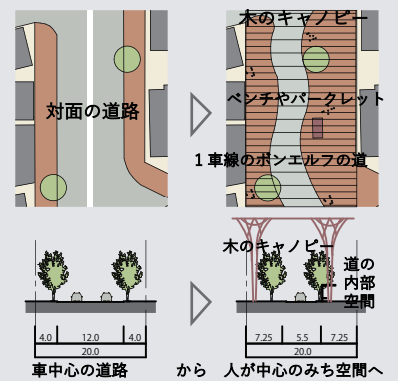
- アイデアの相談窓口**
まちの住民、近隣の学校、商店、アーティスト、企業などから「この空間をこう使いたい」「こういう活動をしてみたい」といったアイデアや相談をキュレーターが受け取る。
- 関係者をつなぎ、合意をつくる (コーディネーション)**
アイデアが具体化してきたら、キュレーターは地域の関係者をつなぎ、場所の提供・安全管理・法制度・近隣調整などの調整役を担う。
- 案件ごとに“チーム”を組む**
一つのアイデアを実現するために、必要な専門性をもつ人々を案件ごとに集め、プロジェクトチームを編成する。
- 外部プレイヤーとのネットワークをひらく**
キュレーターは、地域だけでなくアーティスト、研究者、企業、専門家、海外の都市など外部のプレイヤーとのつながりを持ち、必要に応じてミュージアムロードに呼び込む。これにより、道は地域内のイベント会場ではなく、広く世界とつながる文化の交差点となる。

3 交通 Transport

歩行を育てる＝都市を人間化

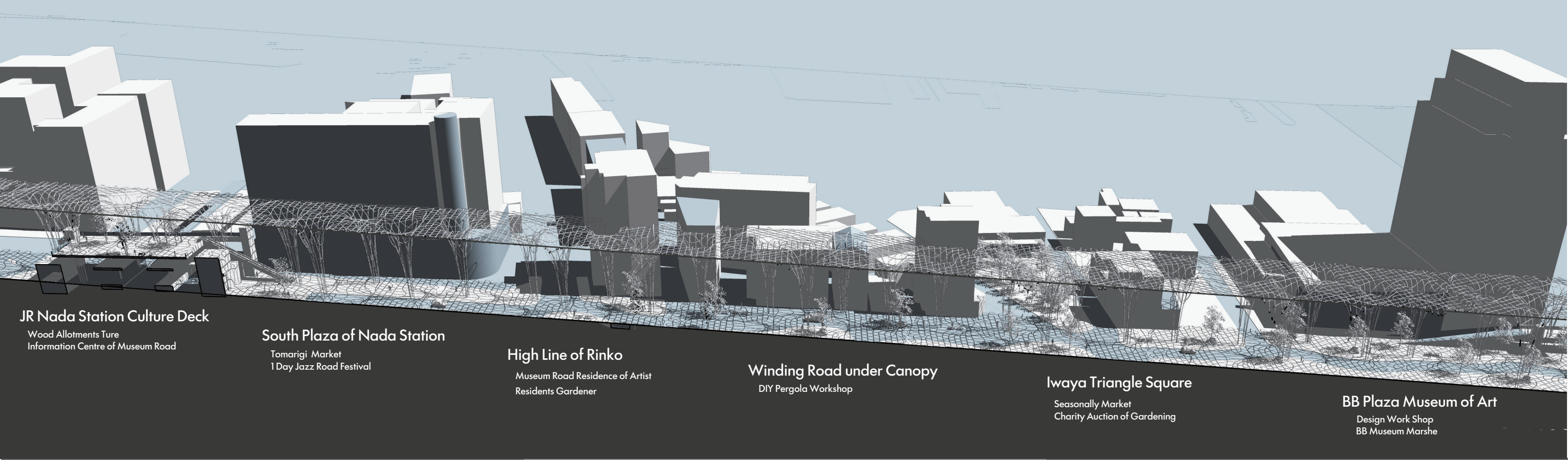
ミュージアムロードは、歩道を広げ、車道を1車線のボンネルフに再編し、人が安全に歩き、滞留できる道に変える。そのときキャンピーは、従来カーオリエンテッドだった道路を、森の小径のように“生き物のための道”へと翻訳する。天井が生まれ、影が生まれ、光が抜け、舗装・家具・緑が歩行を引き寄せ、道が単なる交通経路ではなく滞留し、出会い、文化が宿る都市の内部空間となる。キャンピーは道路を“歩く文化”に変換するインフラである。

- 機能**
車線縮減 (2車線 → 1車線)
歩行と滞留を優先
カフェ・活動スペースが道路内に侵蝕
特殊舗装・照明・展示で歩くことが体験になる
- 社会的意義**
地域の関係性が育つ場
誰かが使い続けることで更新される都市



ミュージアムロードを“育てる”ためのコミュニティ参加プログラム。本提案が目指すアーバンキャンピーは、単なる景観装置でも建築物でもなく、**市民が長い時間をかけて育て続ける“成長型の文化インフラ”ある。そのため、道路空間の更新だけでなく、周辺住民や地域団体、文化施設との協働により、ミュージアムロードを「使いこなし、育て、更新する」ための継続的なコミュニティプログラムを展開する。

- シーズナル・マーケット/夜市**
春：花市、夏：夜市、秋：クラフト市、冬：灯りのまつりを実施し、パーゴラの影が季節ごとに変わり、文化プログラムと響き合う通りを実現する。
- ローカル材の“見える化”エコ認証**
「この区画の木材は○○の森」で育った、と表示し場所ごとのストーリーが歩くだけで読める通りとなる。
- ミュージアムロード・パートナーズ (企業協賛)**
カフェ、ギャラリー、学校、地元企業がキャンピー区画をサポートし、文化育成につながるCSRとして連携することで持続可能な資金循環が生まれる。



JR Nada Station Culture Deck
Wood Allotments Ture
Information Centre of Museum Road

South Plaza of Nada Station
Tomarigi Market
1 Day Jazz Road Festival

High Line of Rinko
Museum Road Residence of Artist
Residents Gardener

Winding Road under Canopy
DIY Pergola Workshop

Iwaya Triangle Square
Seasonally Market
Charity Auction of Gardening

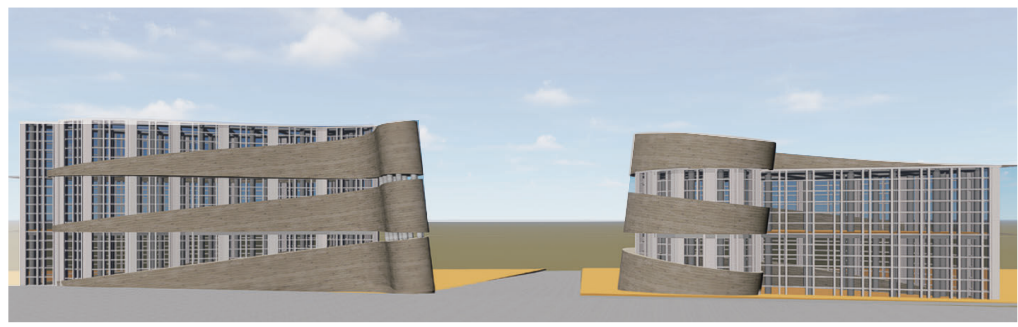
BB Plaza Museum of Art
Design Work Shop
BB Museum Marshé

I 北ゲート植物ミュージアム
North Gate Botanical Museum

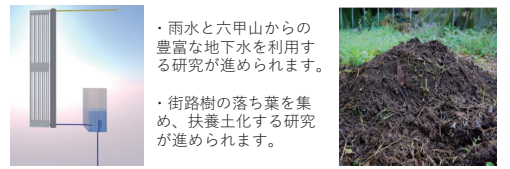
II JR 灘駅・灘カルチャーデッキ
JR NADA Station・NADA Culture Deck

III 阪神 岩屋駅・三角広場
Hanshin Iwaya Station・Triangle Square

ミュージアムロードの北詰に設けられるゲートは街路樹のための“環境支持体”であるキャノピーに水と養分を供給します。六甲山系の沢の植物研究から始まるため、**まずは王子動物園に間借り（第一期）するかたちでスタート**します。植物研究が進められ西棟が建設されます。さらに、温暖化のため六甲山山頂のブナ林保存の機運が高まりを持った時、東棟が建設されます。



温暖化対応冷蔵棟（東棟）（第三期）
気運がたかまりをみせた時、建設が始められます。



温暖化対応冷蔵棟（東棟）では
・六甲山頂に存在するブナ林の植生保存を行います。
・街路樹の落ち葉を集め、扶養土化するサイロが斜

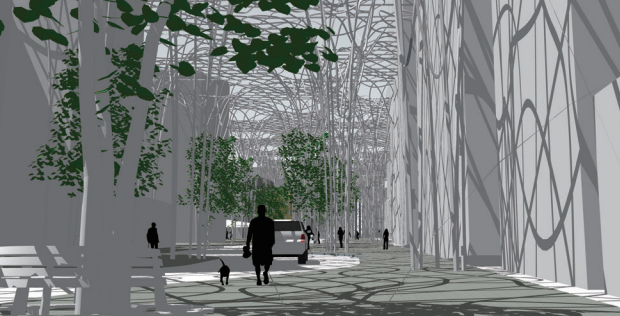
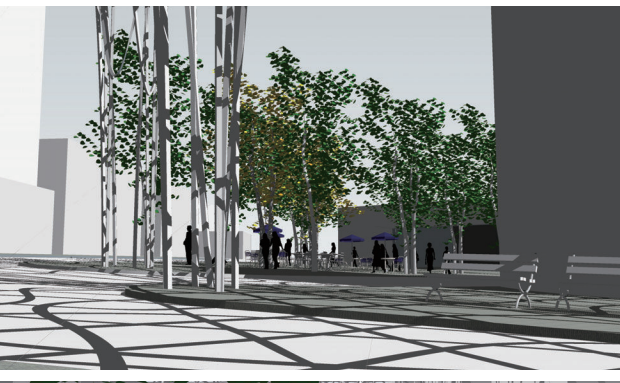
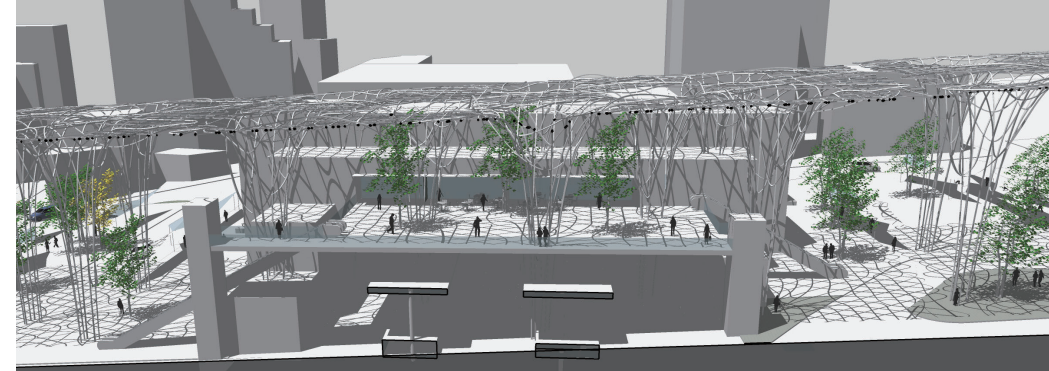
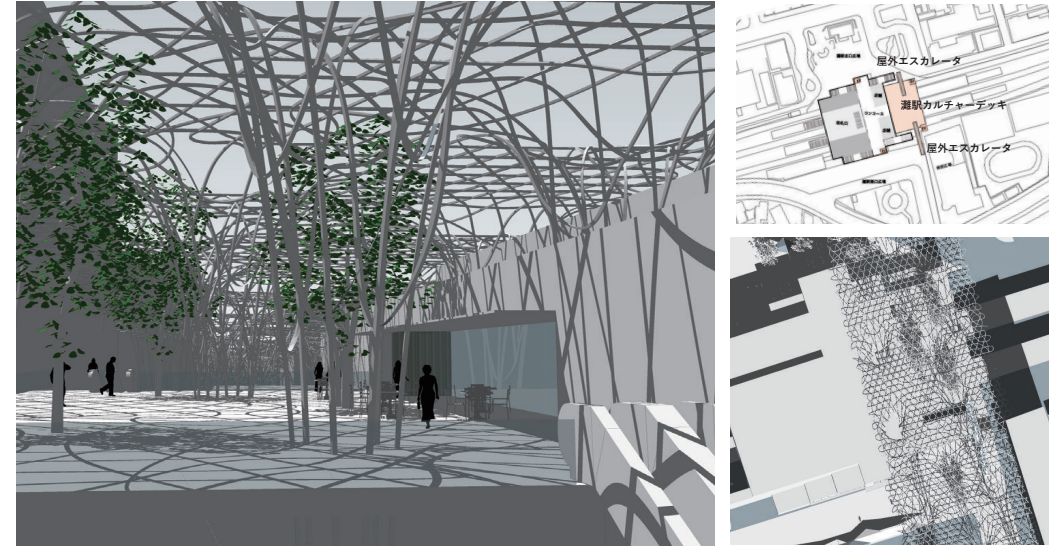
種苗冷凍保存棟（西棟）（第二期）
・六甲山系の沢に特化した植生を研究します。山肌の植生は二次林ですが、沢には六甲山系本来の植生が残されると考え、調査隊を組織し、調査を主導します。
・調査で確認（発見）できた絶滅危惧種、希少種に関する種苗の冷凍保存を行います。
・調査の蓄積とともに、キャノピーへの水と養分を供給します。
・園芸種への転換を進め、希望家庭に配布します。

地熱利用システム
調査で確認（発見）できた絶滅危惧種、希少種のうち蔓性の植物はミュージアムロードのキャノピーにまわりつかせて緑の景観形成に寄与する。

- 絶滅危惧種、要注目希少種調査リスト
 (～標高 400m) イズミカンアオイ (やや希)、ミヤコミズ (希・[全]絶滅危惧Ⅱ類)、セトウチホトトギス (希)
 (～標高 500m) コショウノキ (希・準絶滅危惧)、ヤマジオウ (希・準絶滅危惧)、イズミカンアオイ (やや希)
 (～標高 600m) ミヤマウコギ (希)、イズミカンアオイ (やや希)
 (～標高 700m) ミヤマウコギ (希)、カキノハグサ (希)
 (～標高 800m) ユキザサ (希)、ウスバヒョウタンボク (希・準絶滅危惧) イズミカンアオイ (やや希)、カキノハグサ (希)、ミヤコミズ (希・[全]絶滅危惧Ⅱ類)
 (～標高 900m) ブナ (希)、アズサ (ミズメ) (希)、モミジカラスウリ (希)、セトウチホトトギス (希)



ミュージアムロードを歩くと、**JR 灘駅の線路が文化軸を完全に遮り**、北と南の魅力がつかないという致命的な課題に気づきます。現在は駅舎に入り、階段を上り下りしなければ線路を越えることができず、歩いて楽しむ文化回廊として機能していません。我々は、この断絶を「文化でつなぐ解決策」として、**駅舎東側に線路上の屋外文化広場（灘カルチャーデッキ）**を新設し、地上から直接アクセスできる外部エスカレーターを設置します。これにより、北と南のミュージアムロードは自然につながり、駅の上に生まれた広場が、街の新しい中心となります。単なる通路ではなく、人が集い、眺め、楽しみ、文化が育つ「立体的な文化の節点（ノード）」です。分断された軸を、広場というかたちで縫い合わせることで、ミュージアムロードは初めて一本の文化回廊としての姿を取り戻します。それは、都市に新たな風景と体験をもたらす未来に向けた「文化の架け橋」になります。



灘の阪神岩屋駅の周辺は、商業地や住宅地として栄えてきた地域です。駅前広場では、地域の人々が集まって、敏馬神社の祭りも行われます。「敏馬神社」「西国街道」は、かつての「みぬめの泊」の歴史を残し、日本初の臨港線跡地は公園となって地域の繁栄の記憶を伝えていています。我々は、まちに新しい表情を生み出す神戸ミュージアムロードの空間を中心に、地域の人と訪れる人たちがまちやアートの新しい発見や体験や交流をとおして、過去から未来につづく時間のなかに、このまちの「文化をつなぐ」ための小さな空間を創し存在させます。

ミュージアムロードは、人が中心のみちにして、ところどころにできる小さなオープンスペースにベンチやパーレットを設けて、人々の滞留や出会いを誘います。土休日には歩行者天国として、まちのあちこちで行われるイベントを楽しむフェスティバル・ストリートになります。

ポケットパークの臨港プラザは灘の風景を描く画家の溜り場となり、散歩する人たちが足をとめます。神戸港につながる細長い臨港線跡にはミニ SL も復活もさせて灘の繁栄のメモリアルを継承します。

ミュージアムロードに接する阪神岩屋駅前の三角広場は、敏馬神社の境内と連携したお祭り広場で、祭りの時には地域の人が集まり、ミュージアムロードに神輿を繰り出します。賑わいの核となり、さまざまなパフォーマンスの場として使われます。

敏馬神社のあたりは、昔は都から西国に船で向かう時の最初の宿泊港でみぬめの泊と呼ばれました。神社は北側に西国街道と南側の西国街道（浜街道）が通り、周囲に様々な施設が設けられて、陸からも海からも、多くの参拝者が訪れ賑わったそうです。これからは街道沿いのカフェやレストランや画廊や雑貨店には人が集まります。